

はじめに

本書の著者で公立中学校の数学教師である内田の朝は早い。早朝6時半には家を出て、7時を少し回った頃、勤務校に到着する。ちょっと家を出る時刻が遅くなると交通渋滞にはまり、到着するまでに1時間以上かかることさえある。だから、早めに学校について、時間を有効利用する方が得策である。しかし、その時間を利用して、本書で紹介するような研究をしているのかというとそうではない。それは、中学校教員の本務は学校教育であって「研究」ではないからだ。「“研究”も大事な仕事だ！“研究”授業のためにどれだけ多忙なのか知らないのか！」とお叱りをうけそうだが、本書で述べる「研究」は「科学的」研究であり、“研究”授業の研究とは違う。本書ではまず「科学的」研究とは何かについて、小中学校や高等学校の教員、その他の教育関係者の読者に語りたいと思う。

“研究”授業とは違う「科学的」研究を小中学校や高等学校で行なうためには、まず学校長から許可を得なければならない。そこで、本書のもう一人の著者である教育心理学者の守の出番となる。守は、内田が県教育委員会派遣の現職教員として大学院修士課程で学んだ時の指導教官である。新しい年度になると守が必ず行なうことがある。内田の勤務校を訪問して、学校長に共同研究への協力をお願いすることである。

一方、教育心理学者なら誰でも「科学的」研究ができるかという、そういうわけでもない。本書で詳しく述べるように、「科学的」研究のためには実験が必要であるが、大学の研究者が小中学校や高等学校で実験をやろうとしても、そのための許可を得ることが難しいからだ。学校での実験を受け入れてもらうためには、学校長をはじめとする教員に実験の教育的な意義を理解してもらわなければならない。しかし、現状でそれを期待するのはとても無理である。なぜなら教員免許取得のための教職課程には、「科学的」研究について学ぶような授業は含まれていないからだ。だから、小中学校や高等学校の教員は“研究”授業は知っていても、教育の「科学的」研究についてはほとんど知らない。その結果、大学の教育研究者も小中学校や高等学校で「科学的」研究をすることができないのである。

中学校教員でありながら、学校での「科学的」研究の意義を理解している内田は、そうした意味で稀有な存在である。しかし、その内田も一人では中学校で「科学的」研究をすることには限界があった。内田と守がコンビを組むことで初めて、中学校での「科学的」研究が可能となったのである。本書では、中学校の数学教師と大学の教育心理学研究者が共同で行なった「科学的」研究を紹介することで、教育における「科学的」研究の重要性を読者に伝えたいと思う。「学校現場の協力が得られないので実験ができない」と嘆いている大学の教育心理学研究者の方々には、ご自身の実験研究を行なう際の参考例となれば幸いである。